

と見えて、既に中世に行なわれた信仰習俗の残存形態でなかったかと思われる。これに関して今は詳しく論及できないが、弘海寺が真言宗虚空藏院の末寺に属したといわれる近世にあって（菅水村史）、「新宮山薬師院」という坊の伝承があることは重要である。このことは、おそらくその起源が、南北朝時代に再興された熊野三山の一である新宮山麓に設けられた一坊であったことを想像せしめる。敢て推測をすれば、増峠等にもみられる熊野系統の聖の管理する一坊として出発したものと考えられ、この坊を管理する聖の勧進の一方法として、新宮風呂に入る女性に不浄除けの符を發行し、聖の唱導勧進に結縁奉加する女性は、この符を貰って入湯することにより自己の罪・穢をはらう滅罪の信仰があったものと思われる。大師堂の坊（新宮山弘海寺）となった近世において、なお女性がこの符を貰って入湯しているのも、このような庶民信仰としての滅罪信仰があったからと云えよう。

これを要するに、水主石風呂は村落の熊野三山と密接な関係があったが、それは南北朝時代に熊野系の勧進聖増峠が再興して、熊野権現の風呂と称されたもので、宗教的には熊野三山に詣でる庶民の禊として出発し、三山詣の前行につながる滅罪の信仰があった。そこには湯施行としての宗教的社会的作善の有無は明確でないが、不浄ある女性の罪穢をはらう符を發行し、聖の唱導勧進によつて入湯する女性の宗教的作善を促なしたのである。このようなどころに、中世の村落化した熊野三山とむすんだ水主石風呂の宗教的側面を認めることができるかと云えよう。もっとも紙面の関係上省略した部分が少なくないが、詳細は『香川史学』（三号

・昭49刊）に発表の予定である。

註

- ① 『菅水村史』、『昭47』所収。
- ② 新城常三氏『社寺参詣の社会経済史的研究』。
- ③ 五来重教授『熊野詣』、その他論文参照。
- ④ 三重県四日市市富田善教寺阿弥陀像胎内納入文書。
- ⑤ 五来重教授『高野聖』。
- ⑥ 『今古讀岐名勝図絵』（安政四）。

### スピノザの人間観について

——徳の観念を中心として——

築山修道

スピノザの人間観に見られる根本的特質は、人間がまず第一に自然存在の一つとして規定されている点にある。自然（*natura*）を基底として人間の存在を考えるスピノザのかかる人間観は、彼の徳（*virtus*）の観念に端的に表明されている。スピノザの徳についての考え方は、ギリシヤ的及びキリスト教的な徳の通念とはかなり相違したもので、ある点においては相反的な面すら見られる。このような相違は、相互に異なった形而上学的または宗教的な背景をもつことに帰因すると考えられる面があるとしても、スピノザの徳の観念に見られる特異性には顕著なものがある。彼は徳を人間の本性的な能力（*potentia*）或は人間の本質乃至本性そ

のもの (*ipsa hominis essentia seu natura*) と解している。ところが、個物が自己の存在に固執しようと努める努力 (*conatus, quo unaqueque res in suo esse perseverare conatur*) は、その個物の現実的本質 (*actualem essentiam*) であると考えられている。従って、徳とは、総じて個物が自己の存在を肯定し、自己を保存しようとする努力 (*conatus sese conservandi*) であると言ふことになる。それ故に、スピノザは人間が自己の存在を保存しようとする努力を徳の第一にして且つ唯一の基礎 (*primum et unicum virtutis fundamentum*) として定立する。しかもその場合、徳はそれ自身の遂行が目的であつて、他の目的への手段であつてはならない。

しかし、自己存在の肯定をもつて直ちにそれを徳の第一原理とすることは、それ自体問題であると同時に、またそれだけでは人間の徳を成立せしめる所以のものとは言われ得ないであろう。何故なら、自己存在を肯定する努力は、人間をも含めて一般に個物の現実的本質に属するものであつて、人間にのみ固有な在り方ではないが故に。更に、スピノザの言う自己存在の肯定は、自己の利益の追求をその根本的動機としている限り、単にそれだけでは徳の通念から考えて、所謂「徳」としての十分な規定であるとは認め難い。従つて、右のスピノザの徳の第一規定が徳の通念と矛盾することなく、且つスピノザの規定をも生かす仕方では徳の原理となり得るためには、第一の規定に更に何らかの規定が加えられなければならない。我々がスピノザにそのような規定を求めようとするならば、それは「理性の指導」(*ductus rationis*) であ

る。つまり、人間は理性の指導に従つて行動する限りにおいて本来有徳 (*virtute*) であると言われ得る。第一の自然的規定は第二の理性的規定の制約を受けて真の意味で徳の第一原理として認められ得る。スピノザの徳は、自然を基底としながらも理性の介入を通して、「徳」の通念と共通性をもつて来る。

然るに、その場合スピノザの理性 (*ratio*) が何如なる性質をもつものであるかが問題となる。結論的に言へば、スピノザが言う理性は、超自然的或は反自然的な理性ではない。彼の理性は自然のうちに深く根差し、自然と一致するところの「自然の光」(*lumen naturalis*) と呼ばれ得る性質のものである。理性は人間の本性 (内的自然) と一致するところのものを認識し且つ要求する。従つて、徳の第一規定である自然乃至本性 (*natura*) と第二規定である理性 (*ratio*) との間には本質的な矛盾はない。むしろ、自然的規定は理性的規定によつて方向づけられ、自然は理性を媒介して真に生かされ、本来的な形相 (*forma*) で顕現する。かかる理性を媒介とした徳は更に第三の知的愛 (*amor intellectualis*) を俟つてはじめて完成される。第三の知的愛というものは、(*scientia intuitiva*) 直知観による神への知的愛 (*amor Dei intellectualis*) である。つまり、人間の最高の徳及び善は神への知的愛という在り方において完成に達する。しかも幸福乃至福祉 (*felicitas seu beatitudo*) は徳の報酬ではなくて、徳それ自身であるが故に、神への知的愛のうちにまた最高の幸福があり、最高の自由が存する。

右に見て来た徳の三つの規定は、認識様式の三段階的区分に照

応するもので、言わば人間存在の三様の在り方を表示している。しかし、スピノザにおいてはこのような人間の三様の在り方はいずれの中心をも貫流しているものは自然 (natura) である。従って、自然と対立し、自然を超越するという方向で徳が完成されるのではなく、むしろ自己の内なる本源的な生命としての自然 (内的自然乃至内的生命) を顕現せしめ、自己が一切万有の根源且つ始源である能産的自然 (natura naturans) としての神の内にあることを内観し、以て神を愛することが徳の究極的完成である。

以上、徳の觀念を通して見られたスピノザの人間観の根本的性質は、人間の内的自然を基調とする人間の把握であるということが出来るであろう。しかし、このようなスピノザの人間観は、人間の主体性及び人間の自由の問題と結びついて同時に問題となつて来る根本悪 (Radikalböse) の問題を、人間存在の積極的な問題 (自由意志の問題) として主題的に問うことは出来なかつた。それ故に、人間の自由の問題及び根本悪の問題等は後のドイツ観念論 (カント・シュレーリング等) によって批判的に問われなければならなかつた。

## 行という面より見たる浄土教興起と展開

林 一 宗

宗教の究極的課題は生死超克にあることは言うまでもない。

「真面目に宗教的天地に入らうと思う人ならば、釈尊がその伝記もて教え給ひし如く、親も捨てねばなりませぬ、妻子も捨てねばなりませぬ、財産も捨てねばなりませぬ、国家も捨てねばなりませぬ、進んでは自分そのものも捨てねばなりませぬ。」と清沢満之が語る如く、本来仏教においては釈尊自身が範を示された如く、捨家棄欲の出家道を歩むべきであり、身命を賭する厳しい修行が要求されていた。然るに浄土教においては行は人間の修する自力難行が廃され、如来廻向の他力大行へと転換せしめられている。何故に仏道における「行」が、人間の修する主体的な実践行為より、如来廻向の大行へと転換せしめられねばならなかつたのであろうか。ここに視点を定めながら大乘仏教の興起、浄土教の開顕への底に流れる本願の歴史たる法蔵菩薩精神にふれてゆきたいと思う。

## 二

浄土教の聖典の上でまず注目させられるのは、竜樹の『易行品』であり、人間の修する自力聖道の難行なるに對し、念仏の教えは信方便易行の道として明らかにされている。勿論竜樹をして易行を説かせる法蔵菩薩精神の伝統がその底を貫ぬいて流れているのであり、竜樹はそれを明らかにせんとしているのである。彼は「発願して仏道を求むるは、三千大千世界を擧ぐるよりも重し」と仏道を求むることの難事たることを明かし、「身命を惜まざ、昼夜精進して頭燃を救ふが如くすべし」と身命を賭して修行すべきであると仏道の厳しさを語る。

人生の最大事たる生死を超克せんとするに、生命を賭すること